

花山天文台今昔【3】 花山道路 —その3—

黒河宏企（花山星空ネットワーク）

あすとろん 4 号にも書きましたように、東山ドライブウェイの前身は、花山天文台創設時に建設されたので、「花山道路」と呼ばれていました。陸軍伏見工兵隊が、1927年の夏季演習を兼ねて、蹴上から花山山頂までの約 2km を、たったの 1 ヶ月足らずで一気に仕上げたのですが、その時の記念碑がケプラー点（図 1 参照）付近に今でも残っています。長い間藪の中に埋もれていたのを、10 年ほど前に思いがけず発掘しました。

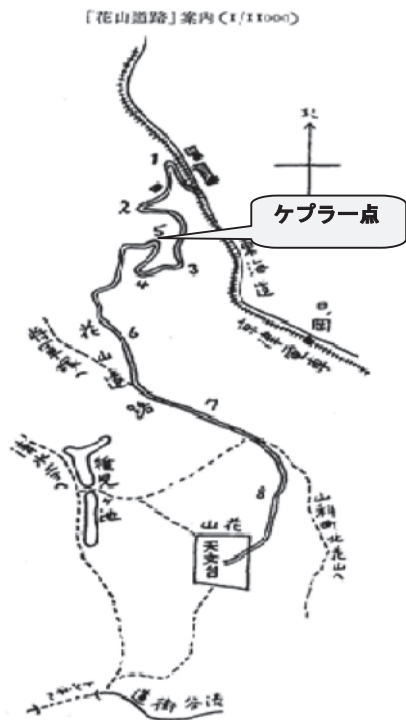


図 1：花山道路



写真 1：ケプラー点付近の藪の中に立つ花山道路記念碑

きっかけは東京の方から、「天文関係の記念碑を訪ね歩いているのですが、今度京都に行く時に花山道路の記念碑も見てみたいのですが」という問い合わせを受けたことでした。その時は私もそのようなものが残っているとは知らなかったので、大先輩の斎藤澄三郎さんに電話をしてお聞きしたところ、「コペルニクスターンの上のどこか林の中にあるはずですよ。」と教えて頂いたのです。とはいえ、夏の間は生い茂った草木に阻まれてなかなか近寄り難く、二の足を踏んでいたのですが、晩秋となって葉っぱが落ちた頃を見計らって、やっと藪に分け入り見つけることができました。下の写真はこの時撮影したものです。



写真2: 左は記念碑の表側で花山道路伏見工兵隊開鑿と読み、右の側面には昭和二年九月・・・同十月十五日という字がなんとか読み取れます。

山本一清先生が書いておられるとおり、確かに「伏見工兵隊開・・・」とか「昭和二年九月・・・」の文字が読み取れます。工兵隊開の下の方がなかなか読めなかったのですが、どうも開鑿（かいさく）の鑿という字らしいということが漢和辞典の助けを借りて判りました。また、九月の開始日は読めないのですが、十月十五日を終了日とすると、やはり一カ月足らずの突貫工事であったということが判ります。

これは貴重な記念碑だと意気込んで、東山ドライブウェイを管轄している京都市役所にこの保存について相談しましたが、1200年を超える古都の歴史の中では、わずか80年前の石柱の保存など相手にされませんでした。それでもあちこちの部局を粘って回る中にやっと、京都市歴史資料館の「碑（いしぶみ）」というホームページになんとか紹介してもらうことだけは出来ました。インターネットで「花山道路碑」と打ち込んで検索するとこのページが出てきますのでご覧ください。また皆さんご自身の足で、ケブラー一点に分け入って訪ねて見られてはいかがでしょうか。

さて、花山道路にまつわる話はそろそろこのくらいにしておきたいと思いますが、これまでどれほど多くの人が汗を流しながら歩いたことでしょうか。汗というと「豪傑の泉」という地点があったということを知ったことがあります。高柳（元龍谷大学教授）さんは、コペルニクス・ターンを回らずにいつも崖を直登したそうなのですが、その後そこに湧き出していた水場で必ず汗を拭いて一服した場所だったのだそうです。服部先生の命名によるらしいのですが、豪傑とは高柳さんのあだ名だそうです。

齊藤澄三郎さんによると、1960年代になって、天文台の車ブームが始まったそうですが、それまではもちろん皆さん歩いていたそうで、京都大学理学部の宇宙物理学教室（左京区北白川追分町）と天文台を1日に2往復することもめずらしくなく、3往復したこともあったそうです。現在それができそうなのは石井さんくらいでしょうか。彼女によると北白川から毎朝7時頃に出て、約1時間で歩いて上がれるのだそうです。

私が天文台に上がるようになった1965年頃は既に皆さん車でしたが、為永さん（元三重大学教授）だけは自転車でした。「下りは時速50kmくらい出てるかな」と自慢しておられたのを思い出します。

10年ほど前にインドネシアから留学していたダーニ（Dahni）君は多段変速車を買って、あの細い体でドライブウェイを漕いで上がっていました。4年くらい前に中国から来ていたリユー（Liu）さんは、自転車の前の籠に本を置いて、二ノ宮金次郎のように読みながら、毎朝押して上がっていました。

大学院生だった神尾君や中村君もドライブウェイを漕いで上がっていましたので、私も挑戦してみようと思い、天文台を停年退職する時に、自転車屋で手ごろな多段変速車を探しました。ところがあれやこれやと迷っている中に、店員さんからバッテリー車を勧められて、買ってしまったのです。石井さんから「先生ずるい」と云われた時は「どきっ」としましたが、今となってはバッテリー車は正解だったと思います。ダーニ君や神尾君の真似をしていれば、「年寄りの冷水」になっていたことでしょう。

東山ドライブウェイに入るまでに、自転車は鹿ヶ谷通りを南下して、永

観堂から南禅寺の中を走り、疎水のトンネルを抜けて蹴上に出ます。石川五右衛門の「絶景かな絶景かな」で有名な南禅寺山門をはじめ、寺々の門からこぼれる紅葉や疎水の桜を横目に見ながら走る楽しみもさることながら、もうひとつの楽しみは、慈氏院（だるま堂）と金地院の入り口に書かれた、歌や問答です。走りながら断片的に読むので、全部読み取るまでに早くても2~3週間くらいはかかるのですが、だるま堂は2ヶ月、金地院は3ヶ月で掛け替わるので、難しい文は解読する前に消えてしまうこともあります。だるま堂には新春から、

「わが宿の 庭の初花 昼は雪 夜は月にと 見えまごうかな」

という歌が出ていましたが、3月に入ると、

「散りぬれば にほひばかりを 梅の花 ありとや袖に 春風の吹く」
（新古今和歌集）に変わりました。いずれも今年は選者が代わったのかなと思うくらい、達磨大師の寺にしては優しい歌で始まりました。

一方、金地院の今年は

「怠らず行けば 千里の外も見ん 牛の歩みの よし遅くとも」

「あに寒骨に徹せずんば 如何でか梅花の香しきを得んや」

で始まっています。以前のものはすぐ忘れてしまうのですが、今年のだるま堂と金地院にそれぞれ出ていた次の歌と問答だけは、なぜか今でも覚えていてます。

「わびぬれば 心も澄めり 草の庵 ひと日ひと日を 送るばかりに」

「柿栗に心あらずと思ふなかれ その涙内に流すなり」

期せずして両方とも、一休さんのものだったと思います。



写真3：南禅寺塔頭 慈氏院（だるま堂）